寄稿
特別寄稿

作家
江上　剛

この度、県内の酒蔵に同行したご縁で、作家の江上先生から福島の酒について特別寄稿をいただきました。

絆の酒

進化生物学者の長谷川眞理子氏は、「ヒトには、他者に協力的であるようにする本質的なものが備わっている」と著書「進化的人間考」（東京大学出版会刊）に書いている。すなわち他者の痛みを自分の痛みとして感じたり、他者の苦難に思いを馳せ、それを助けたりするのがヒトの本質であるというのだ。このことをまさに証明してくれるのが、鈴木酒造店の復活である。

鈴木酒造店は、福島県双葉郡浪江町請戸地区で天保年間以来、200年近くも酒造りをしてきた。

請戸は漁港である。同社の造る「磐城壽」は、板子一枚下は地獄という危険と隣り合わせで働く漁師たちから豊漁を祝うめでたい酒として愛され続けてきた。

2011年３月11日、同社５代目、鈴木大介氏を尋常ならざる不幸が襲った。東日本大震災、それに続く大津波、そして福島第一原発の事故である。

「あの日は、甑倒しを予定していた」と大介氏は言う。

酒造りが一段落し、従業員たちを労う祝いの儀式だ。午後２時46分、激烈な揺れが襲った。目の前がすぐに海である。津波が来ると直感した。家族を避難させると、消防団員の大介氏はポンプ車に乗り込み、請戸地区の住民に避難を呼びかけて回った。午後３時33分、津波が襲ってきた。大介氏は高台に登り、もはや濁った海と化した港を見下ろした。そこに先祖から受け継いできた酒蔵はなかった。

不幸はそれだけではなかった。同年３月12日午後３時36分、福島第一原発一号機が水素爆発を起こしたのである。周辺に広く放射性物質を拡散する人類史上最悪の原発事故が起きた。

私は、震災直後の東北を訪れたことがある。福島のみならず仙台空港にも行き、福島第一原発も訪ねた。あまりの惨状に言葉を失った。街の全てが破壊され、焼かれ、流されていた。そこに多くの人の営みがあったことが信じられなかった。災害から立ち上がろうとしていた人々

を絶望の淵に追いやったのが原発事故による放射性物質の広範囲の拡散である。

取引先の被害状況を調査していた銀行員が放射性測定器（ガイガーカウンター）を道路脇の溝に向け「江上さん、見てください」と言った。針はちぎれんばかりに振り切られていた。

彼は、銀行員として福島の復興に取り組まねばならないにも関わらず、福島では暮らせないと妻子を県外に避難させようとしていた。そのジレンマに苦しんでいたのだ。彼の苦悶と悲嘆に満ちた表情は、今でも忘れられない。

大介氏は、家族と隣県山形の米沢市に避難していた。酒蔵は津波で流され、跡形もない。さらに浪江は放射性物質で汚染されてしまった。酒米を作っていた農家も被災した。もはや酒造りは、不可能ではないかと絶望し、将来のことなど一切、考えられない茫然自失の状態に陥っていた。

ところが2021年３月20日、「道の駅なみえ」に鈴木酒造店が復活した。

この朗報を知り、私は東邦銀行関連の「とうほう地域総合研究所」理事長矢吹光一さんたちと浪江に向かい、大介氏に会った。

私たちを迎えて下さった大介氏は、筆舌に尽くし難い苦労を味わったとは思えない穏やかな方だった。

「たくさんの人たちにお世話になりました」と大介氏は静かに語った。

大介氏が米沢に避難している頃、多くの人が大介氏の安否を心配し、行方を捜していたのだ。

４月１日、鈴木賢二氏から一本の電話が入った。

「酒母を預かっているのを忘れてはいないか」

賢二氏は「酒の神様」と尊称され、現在は福島県の嘱託職員として酒造りのアドバイザーを務めている。

以前は、ハイテクプラザ会津若松技術支援センターの醸造責任者として大介氏など、若手蔵元杜氏の指導に当たっていた。福島の酒が、全国新酒鑑評会で金賞受賞数９年連続日本一という輝かしい歴史を築くことができたのは賢二氏の功績が大である。

大介氏は、地震発生の直前、賢二氏に酒母を預け、分析を依頼していたのだ。

酒母とは酛（もと）ともいわれ、文字通り酒の元、酒造りの母である。酒造りに必要な酵母を大量に培養したものだ。

鈴木酒造店は代々続く蔵付き酵母を使って酒造りをしていた。それがどんな酵母なのか、一度きちんと調べようと考えたのだ。

「すっかり忘れていました」

大介氏は少し照れた。

未曽有の事態に、賢二氏に酒母を預けたことを忘れてしまっていたのだ。この瞬間、胸に小さな希望の火がともった。酒蔵は無くなってしまったが、酒造りの母が残っていたのだ。これさえあればもう一度、酒が造れるかもしれない。

「鈴木さんは、あの絶望的な状況の中で、米沢から会津のハイテクセンターまで通い続けました」

賢二氏は、必死で酵母を分離抽出しようとする大介氏を思い浮かべるかのように目を細めた。そして８種類の酵母を抽出した。これらが長く愛されている地酒「磐城壽」の味や香りを生み出していたのだ。

しかし酵母だけでは酒が造れない。設備が必要である。

「俺の蔵のタンクを使えばいい」

大介氏に救いの手を差し伸べたのは、南会津で「國権」を造る国権酒造社長の細井信浩だ。

国権酒造は創業1877年の老舗であるが、その立場に安住することなく絶えず新しい酒に挑戦し、全国新酒鑑評会で12年連続金賞に輝く名蔵元である。信浩氏は、広島の酒類総合研究所で酒造りを学び、海外進出にも意欲的な経営者である。

「うちの蔵も壁が落ちる被害を受けましたが…」信浩氏は私たちを酒蔵に案内しながら言った。地震が会津の大地を揺らし、酒蔵に大きな被害を与えたのだ。信浩氏も暗澹たる気持ちになったことだろう。

「酒販店の方が、『壁土入りの酒』として売ればいいと冗談を言ってくださったので、それが力になりました」と信浩氏は笑った。

信浩氏自身が他の人から勇気づけられ地震から復活しようとしていた。それならば大介氏を助けよう。幸いタンクに余力がある。酵母があるなら大介氏に酒を造らせよう。

「ライバルではないのですか？」という私の問いに「いえいえ、福島の酒造り仲間は皆、仲がいいんです。小さな業界ですからね」とまた笑った。

米が無ければ別の蔵元が届けてくれた。人手が足らなければ、協力を申し出る蔵元がいる。国権酒造の杜氏も大介氏に協力した。

「問題は、税務署でした。酒は、免許制なので、浪江で作らねば浪江の酒として出荷できないのです」

大介氏は言った。

国権酒造で造った酒は鈴木酒造店の酒であっても、それを名乗ることができないのだ。それが法律である。

「細井さんはご苦労されたと思います」

信浩氏は、浪江の酒として出荷させようと仙台国税局と掛け合ったのだ。

「苦労はしませんでしたよ。税務署の人たちも、鈴木酒造店の苦難をわかっていましたからね。鈴木酒造店の名前で出荷させたいとの私の思いに共感してくださって『我々も同じ気持ちです』とすんなり許可を下ろしてくださいました。あの時だけは税務署にもいい人がいるんだと思いましたね」

法律を逸脱できない税務署でさえ震災、津波、原発事故から復活しようとする福島の蔵元たちへの支援を惜しまなかったのだ。

「７月に２千本の『磐城壽』が出荷できました。本当に有難かったです。いつまでも酒販店の棚を空けたままにしていたら、酒蔵が復活できたとしても、自分の棚が無くなって売ることができませんから」

酒造りを復活させたとしても、１年も２年もかかってしまうと酒販店の棚には別のメーカーの酒が並んでしまい、もはや「磐城壽」の居場所はなくなるのだ。４か月で出荷された「磐城壽」はあっという間に売り切れた。多くの消費者が待っていてくれたのだ。

一方、賢二氏は、鈴木酒造店を福島で復活させようと、酒蔵を探して県内各地を走り回った。

「残念ですが、なかなか適当な蔵が見つからなかったです」

賢二氏は肩を落とした。

復活を急ぐ大介氏は、避難先の山形の長井市で廃業する酒造メーカーを買収した。いつか浪江で酒造りを復活できる日を夢見て、酒造りに励んでいた。

そしてついにその日がきたのだ。浪江に道の駅ができる。そこに鈴木酒造店を復活させるプロジェクトが動き出したのだ。鈴木酒造店は、万人が認める浪江の復活のシンボルなのである。

2021年３月20日、震災から10年の時を経て浪江の地に鈴木酒造店は復活した。浪江の米で浪江の水で、浪江の酒造りが始まったのである。

今年、福島は残念ながら、全国新酒鑑評会で10年連続金賞受賞数日本一の座を逃してしまった。しかし鈴木酒造店を復活させたのは、それらに勝る金賞である。福島の酒造りの「絆」は、一層、太く、強くなったに違いない。

現在、日本酒の未来は決して明るいとは言えない。出荷量は、1973年の177万キロリットルをピークに減少を続け、2020年度には41万キロリットルまで落ち込んでしまった。コロナ禍でさらに落ち込んでいることだろう。酒蔵も１か月に約３つも廃業していると言われ、かつては1900弱もあったが、2023年度には1164となってしまった。しかし落ちるところまで落ちたからこそ、新しい芽吹きがあるのだ。

福島県喜多方に大正８年創業の「喜多の華酒造場」がある。社長の星敬志氏は、後継者が無く廃業を考えていた。そこに長女の里英氏が東京の職場を退職し、酒を造りたいと帰ってきた。ハイテクプラザなどで酒造りを学び、今では杜氏として酒造りに責任を持っている。女性の感性を生かした新しい酒が誕生することだろう。

ハイテクプラザには酒造りを学ぼうと意欲を燃やす若者たちが多く集まっている。教室では、杜氏たちや賢二氏の後継者である主任研究員の高橋亮氏らが熱意のこもった授業を展開していた。

長谷川眞理子氏が言うようにヒトがヒトたる所以は助け合い、絆を結ぶことである。福島の酒は、震災、津波、原発事故などから復活しようとお互いに助け合う「絆の酒」と言えるだろう。

今、世界は分断化に進んでいる。ロシアのウクライナ侵攻や中国の台湾への圧力などで、人々は互いに疑心暗鬼となり、暗い未来しか描けない。

そのような時代だからこそ人類を襲った未曽有の災害から復活しようとする「磐城壽」など、「福島の酒」を味わうことでヒトとヒトとの「絆」の大切さ、重みを思い起こしたい。人類の未来のために。